

## 略 歴

### ジェームズ・レイサイド

生地・生年月日 1957年3月17日にプネ（インド）にて母レイサイド，ヴァレリー，父レイサイド，イアン・マシュ・ペイトンの次男として誕生。兄にマーク，ダグラス，弟にピーター，ベンジャミン。

#### 学 歴

- 1963年 ウイトフィールドズ小学校，セント・オールバンズ市（イギリス・ハートフォードシャー南部。）入学
- 1968年 セント・オールバンズ・スクール，セント・オールバンズ市，入学
- 1976年 エクセター・カレッジ，オックスフォード大学入学（英文学と言語）
- 1980年 オックスフォード大学，英文学博士課程入学
- 1984年 英文学専攻博士課程修了（D.Phil. 取得）
- 1985年 エクセター大学教育課程修了（PGCE 取得）

#### 職 歴

- 1985年 ILC 英語学校講師
- 1989年 慶應義塾大学訪問講師
- 1992年 慶應義塾大学法学部専任講師
- 1996年 慶應義塾大学助教教授
- 1997年 派遣留学でパリ第7大学（デイドロ大学）で訪問研究者（1999年ま

で)

- 2000 年 慶應義塾大学教授  
2005 年 慶應義塾外国語学校主事 (2007 年まで)  
2011 年 外国語研究教育運営委員会副署長 (2013 年まで)  
2013 年 ケンブリッジ大学アジア中東学部で訪問研究者 (2014 年まで)  
2015 年 GIC 運営委員会アカデミック・コーディネータ (2018 年まで)  
2018 年 GIC 運営委員会副委員長

## 著書・翻訳

### 翻 訳

*Dark Pictures and other Stories: Translated and with an Afterword by James Raeside.* Orion Press (University of Michigan): Ann Arbor, 2000.

To the Temple 五十嵐勉著『ワットプノムへ』の翻訳 2008 (<http://www.asiawave.co.jp/bungeishichoo/novelpdf/to%20the%20temple.pdf>).

*There Stands my Pagoda* 野間宏著, 「わが塔はそこに立つ」の英訳 (未発表)

### 著 書

“Self-Consciousness in the Works of Certain Major Eighteenth-Century French and English Novelists” 1984.12 オックスフォード大学英文学学部 (Faculty of English Language and Literature)

“Sir Charles Grandison: The Hero in Retreat” *The Hiyoshi Review of English Studies* 24, pp. 85-97, 1994. 9

“A Consideration of Nicolson Baker’s *The Fermata*” 教養論叢 (慶應義塾大学法学研究会) 97, pp. 26-47, 1994.6.

「『我が塔はそこに立つ』とヨーロッパ文学」野間宏の会報 3 pp. 26-47 1995

“This is Not Hell Nor Am I Out of It: Noma Hiroshi’s *Waga tō wa soko ni tatsu*”. *Japan Forum* 9.2, pp. 195-215, 1997.

“The Spirit is Willing but the Flesh is Strong: Mishima Yukio’s *Kinjiki* and Oscar Wilde” *Comparative Literature Studies*. 36, pp. 1-23, 1999.

- “Quelques liens entre l'érotisme de Georges Bataille et Gogo no Eikô de Mishima Yukio”  
*Japan Pluriel 3. Actes du troisième colloque de la Société française des études Japonaises.*  
 Paris: Picquier, pp. 377-394, 1999.
- 『暗い絵』から Dark Pictures へ」野間宏の会会報 3, pp. 29-34, 2000.
- “The Money-go-round: Twentieth-Century Picaresque in Priestley's *The Good Companions* and Ibuse's *The Bill-Collecting Trip*”. *New Comparison* 35/36 pp. 266-280, 2003).
- “This Death in Life: Leprosy in Mishima Yukio's *Raiô no terasu* and beyond”. *Japan Forum* 15.1, pp. 99-123, 2003.
- “The Shandyesque in Natsume Soseki's *Kusamakura*” 教養論叢（慶應義塾大学法学研究会）123, 89-105, 2005.
- “The Burakumin as 'Other' in Noma Hiroshi's *Circle of Youth*”. in R. Hutchinson and M. Williams (eds.). *Representing the Other: A Critical Approach to Modern Japanese Literature*. (Routledge, 2006)
- 「三島由紀夫とジャン・ラシーヌ」『混沌と抗戦—三島由紀夫と日本、そして世界』井上隆史他（編集），375-389，水平社，2016.

### 未発表

- 「Un roman digne d'être traduit ? *Shizumeru Taki* / Une cascade engloutie de Mishima Yukio」*Publications du Collège de France*. 2022 年予定

日吉の英語部会に属する先生方を除けば、特に50歳以下の義塾の教職員は、私のことを「自転車で通うへんな外国人おやじ」というふう目撃されていることでしょう。自転車のことなら有罪確定です。それだけしか知られていないのは少し悲しいが、自転車に乗っていることは事実です。健康的で、環境に優しいし、授業の前後の気分転換になるので、私から見て長所ばかりです。しかも、その関係で数少ない授業以外の教育機関として慶應に貢献する機会を得ることができたのです。それについてはまた最後に触れるつもりです。

自転車のことはさておき、「へんな外国人」のレッテルをもう少し深く探ってみましょう。日本に来たばかりの頃に読んだ本によると、「へんな外国人」と決めつけられるということは、言い換えれば「(外国人なのに)日本語が達者なので、話す違和感を感じる」という意味だと理解して良いそうです。もしそうであれば、私が初めて慶應義塾で教卓に立った時は「へん」ではありませんでした。多少漢字を読むことはできたものの、話しことばは非常に辿々しかった。今思うと恥ずかしくなります。

それでは「へん」なことをとりあえず削除して、「外国人」だけに絞ります。私が来日した80年代には「外国人」にはどういうイメージがあったのでしょうか。よく言えばお人よしで単純、悪く言えば不器用、礼儀知らずで体が大きいということでしょうか。そして不真面目で、簡単に約束を破る傾向にある……。その描写が私に当てはまるかどうかわからないが、慶應との出会いは「外国人」の不真面目さのお陰でした。外語学校で教えていた某イギリス人が突然辞めたので、私が代わりに秋学期から代講することになったのです。その脆い関係が出来たのち、運良く外語学校の講師から法学部の訪問講師、そして専任講師になることができました。当時外国語学校の校長は法学部の迫村純男先生でしたので先生の推薦を得て訪問講師になることができたのです。いまでも迫村先生は私の恩人だと思っています。

うまい具合に私は法学部初の所謂「ネーティブ」の専任教員になりました。

その意味で、「外国人」から「ネーティブ」へ昇進したが、上に書いた通り、「へん」に日本語が流暢ではありませんでした。無論、私の後に任命された外国人先生とその意味でまったく異なっています。

確かに（自慢に聞こえるかもしれませんが）来日3年目にして日本語能力試験1級に合格しました（本当にぎりぎりだったが）。しかし間違いなく当時の試験は現在と比べてはるかに易しかったからでした。合格したことを日本人の知り合いに伝えた時のその人のまったく信じられないといった表情を今でもありありと覚えています。専任になってから、マルバツの簡単な仕事を理解できない私を見て、信じられないといった諦めに似た同僚の表情もよく覚えています。

以上の意味で、本当に「へん」な在日外国人の大先輩、デーブ・スペクターは「外国人は日本ではパンダとして扱われている。」と有名な発言をしたり、アメリカ人のユーモリスト、デーブ・バリーは日本を訪問した時に自分と自分の家族が水牛のように見られたと書いたことがあります。後者は上の定義に合致するように、大きさ、不器用、単純ということですよ。もちろん自分はパンダとして扱われたと冗談で言ったスペクターさんは、後に本当に日本人と同様に扱われるようになったのでパンダを卒業しました。そしてデーブ・バリーは数週間の日本滞在後、アメリカに帰ってからのいつもの自嘲的な本を書きました。しかしそれらの例を考慮すると慶應に勤める自分の存在は一体何の動物なのかを考えるのは多少面白いと思いました。「ネーティブ」なので、イギリスの特有種類（ネーティブ・スピーシーズ）に例えれば良いのではないかと思ったが、あまり良い候補者を思いつきませんでした。狐、獺？ カッコ良すぎる。栗鼠、兎？ 可愛らしすぎる。羊、山羊？ 便利すぎる。結局一番適切なのはラマではないかと結論づけました。

ラマが馬の国に到着すると、現地の受け入れる側はラマをどう扱えば良いかと戸惑うでしょう。変わった顔をしているがある程度面白さを感じる、しかしペットとしては十分可愛いらしくない。逆に便利な動物かどうか……。確かに馬のように強くて便利なものではないが、なんとか役に立つのではないかと。

当然その例えのもとにはスイフト『ガリヴァー旅行記』です（私は大昔 18 世紀文学の専門家だったが）。自分自身をラマに例えると、慶應同僚の皆様が聡明で寛容な話す馬フウイヌム、に例えることになります。自分はフウイヌムの国のラマのように現地人ほど実力と知識はないが、ある程度役に立つものでした。

ふざげた話しを最後にやめて、本当に長い間慶應義塾の先生方には親切にしてください感謝の言葉しかありません。自分の出来の悪さ（とくに最初の数年間）を大目にみていただいたので、少しずつラマなりに、教職員の一人前でなくとも4分の3くらいになりました。上に述べたように「ネーティブ」の授業以外大した貢献はできなかったが、自転車を毎日乗る習慣によって7年間体育会の自転車競技部の部長も務めさせていただきました。定年したあとも元部長として時々部員を応援するのを楽しみにしています。それに暫く非常勤講師としてまだ慶應の授業をもつつもりですので、「自転車の外国人おやじ」は時々両キャンパスに出没することになります。

33 年間、教職員と職員の皆様、大変お世話になりました。